

No.

No.

4

嘲の態度を一般の通弊として一概に痛罵し去る必要は今の処ない。何故なら通弊と云ふ程のことではあるからである。畢竟一時的現象に遇おない故に、永遠的意義が稀薄だと言つて了へば済むからである。

それ故、自嘲的態度は早晩ありて来たらしく、こればかりは、論理は成立しないからか、知れぬないか、いつまでも自嘲のみに甘いてゐることば、創作的發展の経路に無頓着過ぎるとは言ひ得るのだ。

そこび今つと早く結論をもつてやゝへば、今日の自嘲かう、智慧のない話にか、反動的に轉向さる可き世界は、重厚な(軽妙に)墮したるウイットのやうなものではない。

明るい世界であつてもよいと云ふことになり、何も予言的に明るい世界が到来しなればならぬと云ふのにはないか。尚、かうした論據に就いては山岸田國士氏から種々と解決を與へて貰へれば幸かと思つてゐる。

衣笠武生